

日本の社会学系雑誌の知識社会学に向けて(1)

—計量分析を介して見えてくる、『社会学評論』に伴走し、なおかつ挑戦する兆候の芽—

甲南大学 栗田宣義

1 『社会学評論』の位置

『社会学評論』は日本社会学の頂点に立つ社会学専門誌ではあるが、決して孤高の存在ではない。『現代社会学研究』『社会学年報』『年報社会学論集』『フォーラム現代社会学』『西日本社会学学会年報』といった地域を基盤とした諸学会誌、『家族社会学研究』『日本労働社会学学会年報』『日本都市社会学学会年報』『スポーツ社会学研究』『社会学史研究』『地域社会学学会年報』『現代社会学理論研究』『保健医療社会学論集』『理論と方法』『環境社会学研究』などに代表される社会学諸分野に係わる学会誌、独立した研究会や研究所、同人や伝統に基づく『ソシオロジ』『ソシオロギス』『理論と動態』、そして、かつての『現代社会学』など、数多の社会学系雑誌と『社会学評論』は競い合い、補い合う関係にある。また、そうであるべきだ。

2 日本の ASR と AJS たりうる存在とは

一般に、学問の発展は知的革新を含む独創的な学術論文の発表ならびにそれを継続的に可能ならしめる安定した媒体の存立が頼みである。社会学もその例外ではなく、『社会学評論』ははじめ各誌の存在が、新人の登竜門として、碩学による学殖披瀝、実力者による最先端教示の場として、日本社会学の命運を担ってきた。今後もそれは変わらないだろう。

その知名度、影響力、総合性などの視角から見ると、建前の議論はさておき、『社会学評論』と他誌との関係は対等というよりは、例外的に特異な立場を確保した『ソシオロジ』などを除き、残念ながら、「一強多弱」とも言うべき状況であり、並び立つ好敵手は、概ね存在しない。翻って米国の状況を鑑みるに、社会学世界の覇者 ASR と AJS の「二強」体制が際立つ。ロイターが提唱する学術誌格付け指数 Impact Factor の大きさも両誌が双壁を成す。米英語圏の学術誌であることを割り引いても、ASR と AJS 双方にとって、伴走者であると共に挑戦者である切磋琢磨の好環境がそこに醸成されていることは刮目に値しよう。『社会学評論』を ASR に喩えるならば、その好敵手としての、日本の AJS を産み出すことは、頗る有意義に違いない。

3 『社会学評論』に伴走し、なおかつ挑戦する

本報告の分析対象となる、その内に『社会学評論』をも含む社会学系雑誌群の中で、云うまでもなく『社会学評論』は際だった位置を占める。媒体の特性(学会誌か否か)、伝統(創刊からの年数)、媒体発行累積数(通号数)、掲載論文累積数、自誌引用件数、他誌引用件数などの定量的指標から作成した諸変数群を用いた統計解析に基づく諸知見からは、勿論、『社会学評論』の「一人勝ち」状況は明白だ。しかしながら、計量分析に基づく精査を通じて、そこに新たな動向の芽も見いだせる。自誌引用件数が他誌引用件数を凌駕しがちな連字符社会学系統の学会誌(知見α)と較べ、他誌引用件数が相対的重みを有する専門誌・商業誌や一部の例外的な学会誌(知見β)の動向にこそ、むしろ『社会学評論』と良い意味で拮抗、相補する兆候が見いだせるからだ。そこには、過度な分業化や冗長な専門特化に起因した「蝸壺化」を乗り越え、社会学本来の使命に立ち戻り、全ての社会学研究者、いや全ての社会成員に開かれた学問コミュニティを、『社会学評論』と共に築こうとする集会的企図が見え隠れする。まさに、『社会学評論』に伴走し、なおかつ挑戦する知的趨勢が生まれつつあるのかもしれない。

本報告を礎として、『社会学評論』に伴走し、なおかつ挑戦する、社会学系雑誌の新しい潮流を定量的に確認し、更には、それを支援する機運を高め、日本社会学の知的躍進への一助としたい。

リファレンス

- 有賀喜左衛門(1950)「非近代性と封建性」『社会学評論』第1巻 第1号 2-10頁
鈴木広(1983)「創刊にあたって」『日本都市社会学学会年報』創刊号 1-2頁
高坂健次(1986)「数理社会学の意義と必要性」『理論と方法』創刊号 1-14頁
布施鉄治(1988)「地域社会学研究の意義と方法」『現代社会学研究』創刊号 1-34頁
森岡清美(1989)「家族社会学セミナーの成立」『家族社会学研究』創刊号 1-5頁
片桐新自(2002)「現代社会の危機と社会学の役割」『フォーラム現代社会学』創刊号 3-13頁